



アラン ノルマンディー 人のプロポII 【2013年 8月号】

翻訳：高村 昌憲

- 百五十一 女性たちの薬
- 百五十二 氷河
- 百五十三 闘牛
- 百五十四 溝
- 百五十五 労働者と思想家
- 百五十六 演習と戦争
- 百五十七 メフィストはトランプをする
- 百五十八 グランデ神父の亡霊
- 百五十九 善と美と儀式
- 百六十 生徒だった教授
- 百六十一 観念が恐怖を生む
- 百六十二 正直と信用
- 百六十三 大臣たちの学校
- 百六十四 統計学
- 百六十五 天国、地獄、煉獄
- 百六十六 アランはアランに言う
- 百六十七 枯葉と氷結
- 百六十八 坑内爆発
- 百六十九 若いクリスティアーナと嘘
- 百七十 田舎の大所有者
- 百七十一 タラマとジャンヌ・ダルク
- 百七十二 大聖堂と町
- 百七十三 平和同盟
- 百七十四 神の子キリスト
- 百七十五 大聖堂と森

百五十一 女性たちの薬 (REMÈDES DE BONNE FEMMES)

その若い娘は私に言いました、「ディエップ⁽¹⁾の近くに、お守りや物神を信じる農民がまだいるのをあなたは信じますか。昨日、私はアルクの森⁽²⁾で木の根元を浅く耕している二人の女性を見ました。そこで何を探しているのですか、と尋ねたところ、彼女たちは二、三匹の黒褐色の黄金虫に似た昆虫を見せてくれました。それはミルクで潰瘍になる幼い弟を治すためです、と女性の一人が言いました。これらの昆虫を子供の首の回りに一列に付けるのです。大変に生き生きとした新鮮な昆虫でなければなりません。この様にして、ここの農民たちは病気の治療をしています。スーダン人やパタゴニア人たちの話を聞いていると思わないでしょうか」。

私は彼女に答えました、「私には、パタゴニア人やスーダン人たちに医学の基礎があるという考えはありません。彼らのことを話す者たちにはびっくりするだけです。そして、あなたがびっくりしたアルクの森の未開的行為に私もびっくりしますが、それはあなた自身の考えです。私としては同胞のフランス人を良く観察した後に、人間は見かけによらず愚かではないと考えます。彼らの話は屢々おかしいもので、彼らの行いも珍しいことがあります。そして、それは極めて当然です。話に騙されても危険ではありません。しかし、自然は昔からずっと間違った行動を直しています。従ってあなたが話すこれらの黒褐色の昆虫が身を守ろうとして、人間の肌の発疱薬となる何らかの体液を分泌するのはあり得ることです。この体液が子供の敏感な肌に引いた一本の筋が少しは作用することもあり得ることです。今に首の発疱薬が、ミルクでなる潰瘍を治すことが出来るだろうと私は信じますし、口の炎症は昔から医者が診ていたことです。生きている昆虫で出来た首飾りは、まさに野生的です。しかし、薬剤師によって粉々に砕いたマネハンミョウは発疱薬になりますし、決して笑うべきことではありません。犬を見てご覧なさい。自分で下剤を飲もうとして草を食べます。もしも犬が食べた草に名前を付けたなら、十分に学者です」。

彼女は言いました、「はい、私は大変に愚かです。しかし、見てみましょう、何故九匹の虫であって、八匹でも十匹でもないのでしょうか」。

「何故なら、人間は良い薬であってもやはり正確で的確な話が好きであるからです。あなたに水薬をくれる医者も次のように良く言います。時々、スプーン一杯の量を飲んで下さい。しかし大変正確に、一時間毎にスプーン一杯ですとも言います。そして病人は何分経ったか気にします。全ての宗教は、大変に合理的な風習や子供っぽい話によって生まれて来ます。あなたは眠れない程の間違いを犯した、と私がもしも友人に言っても、何も言い落とすことなくきっぱりと私に言うことです。私たちは償うことが出来ることを償うでしょうし、非難すべきことを非難する、と言うことです。そしてその次に、あなたはそのことを考えません。もしも私がそのことを彼に言ったとしても、彼は殆ど私の言うことを聞かないでしょう。何故なら、それは余りに簡潔であるからです。告解場にいる人々を導いて満足させてやるためには〈神〉や〈悪魔〉や〈地獄〉を創らなければなりませんでした。子供たちもそんな風です。もしも子供たちにスープを飲ませ

たいと思ったなら、奇跡的な素晴らしい話をしてあげなければなりません」と私は言いました。
(一九〇八年九月九日)

- (1) ノルマンディー地方のイギリス海峡に臨む港町で、郡庁所在地。
- (2) ディエップから北東約一四〇キロ、ドーヴァー海峡の港町カレーから南東約四〇キロに位置する森と思われる。

百五十二 氷河 (LE GLACIER)

草原や樅の木の上に積もった大雪の景色は、何時も少しショックを与えます。私は、今でもそれを良く見る事が出来ません。奇跡とか夢に大変良く似ています。しかしながら私は、谷間よりも山頂の方が寒いという逆説のことを良く考えました。未だ夏山の雪を見たことがなく、人の話を聞いて信じていた幼い少女に、私はそのことをまさに文字通り説明しました。しかし、どんなに綿密に説明しても、事物とは余りに違います。それ故に、私は例を引いて観念的に分らせるばかりで、山頂の雪が繊細な氷の結晶体になり、固体になった雨が次々にゆっくりと流れて行き、その巨大な白い塊が太陽の熱を反射して仕舞い、吸収して溶けることがないと分らせるだけでした。この様にして私は、最後には氷となって犁の刃のようになって大地を切り開いて行く、固くなった雪の河の流れを見るようになりました。遠近法で見るのを少し変えるために、私が別の岩に座りに行く間、事物との関係が私には見えてきました。私は巨大な塊の重さを量り、その摩擦を算定し、距離と絶壁の高さも深く研究しました。それというのも、絵葉書のような世界が私たちに与えられているからです。もしもそれが本当の世界であって欲しいのなら、それを彫らねばなりません。

この様に私は言葉でなく、眼で思考したので、私はもっと大きな道を下りましたが、そこで先が尖った棒を持った三人のイギリス人女性が下りて行くのを見ました。続いて受勲者の男性が来て、次にドイツ人の掃除夫、次に若者たちが小走りしていて、次に眼鏡をかけた牧師の姿、次に又女性たちがいて、怖がっていました。全員がリウマチ患者のようなゆっくりした歩みで、登りに六時間、降りるのに二時間かかっていました。それは泉のように流れていました。

私は、岩場の上の蟻のような彼らを遠くから見っていました。腰を痛める危険がある悪路でした。全員がそこを通って行き、恐くても誇りを持っていました。全員が仕事を終えた労働者のように去って行きました。鉄具を付けた棒を持って、全員が次のように言っているようでした。そこには見るべきものがあり、やるべきことがあり、皆が見なければなりませんし、皆がやらなければなりません。私たちは最早滑稽ではありません。

従って、ラブラーの狡いパニユルジュの羊たちは降りて行ったのであり、その間にリウマチ患者は絵葉書を贈り、小さな山岳民族たちは同じ言葉を繰り返していました、「新鮮な良いミルクよ、水晶よ」。その間に太陽は沈みました。人間の泉はゆっくりと流れましたが、まるで誰かが観光客のための貯水池を閉鎖したかのようです。最後の人々が通って行きます。彼らの後には、ミルクの商人や水晶の商人が飛び跳ねながら駈け降りて行き、その後は山羊飼いの登場です、

ブリキで出来た喇叭を持っていて、山羊は脇役です。最後にリュウマチ患者が来ます、氷河の監視人です。これで閉店です。

(一九〇八年九月十日)

百五十三 闘牛 (LE TAUREAU)

散歩者が最後の縦の木立を過ぎ行くと、黒い峡谷と大変険しい岩場の斜面の間にある、密生した草で被われた草原に着きます。大気のように軽くて生き生きした鈴の音を聞いて、彼は立ち止まります。二人の羊飼いに気付きますが、彼らは眠っていて、善良そうな太った黄色の犬と、頭を回している鈍い動きの雌牛たちがいます。彼は振り返ります。谷の奥の方に鉛色をした小さな村と、雪のように白い急流が見えます。幾片かの雲が斜面に懸かっています。散歩者は両眼を見開き胸を開け、小鳥のように身が軽くなったのを感じます。

この時、鋭い高低音で転調する嘎れた喇叭のような音が聞こえ、飴が次々に生まれて谷を回って行きます。それは雄牛の登場です、雌牛たちの王であり、高原の王です。

雄牛は敵に向かいます。散歩者は、彼自身が敵であることを直ぐに分かりませんが、分かるや否や岩へ走り、猫のようによじ登り、雄牛の息が聞こえなくなるまでじっとして、心の平安を少し取り戻します。

私はこの行動に我を忘れ、階段栈敷に座っていたようなものです、闘牛の起源を一度に理解しました。何故なら結局のところ飼慣らされていると言われるこの動物であっても、少なくとも動物園のライオンと同じ位に凶暴であるからです。そして、雌牛に草を食べさせている者たちは、頑健で激しい気性の雄牛を望みます。それ故に雄牛の番人たちは、家族の中の恐ろしい父親の回りをゆっくり回って、旋回しながら牛の角の一撃を避けるのにずっと慣れています。そのダンスのような動きは、ダンスになる前の有益な練習でもありました。長い槍を使って雄牛の突進を止めるのを覚えた馬に乗った人の足が、何故がっちりと防備されているのかも私は理解します。腹を裂かれた馬が一頭ならずいたこと、頭の回転が早い羊飼いが馬に拍車をかけて赤いハンカチーフを振りながらぼんやりしている雄牛を引きつけることを学ぶのを私は理解しますし、その間に仲間が自由になります。観客は誰も居りません。しかし、私は大変に当惑します。雄牛が怒り、岩場の斜面があれば女性や子供や老人たちは、今の私がそうであるように、事の成り行きで観覧席に座ることになったのです。つまりそんなことを考える前から曲馬場や闘牛場で観客は喝采していました。そして雄牛の死に関して、雌牛たちの王が最早理性に耳を貸したくないと思うのは、屢々当然のことであると私は想像します。かくして雄牛を疲れさせて、余り危険を冒すこともなく殺す方法を人々は学びました。どういうことかそれが娯楽になり、直ぐに宗教になっていくのが難なく分かります。でも、少なくとも私は決して同じ様には考えませんでした。私はその傍らで大声で言いました。雄牛よ、有難う。

(一九〇八年九月十六日)

百五十四 溝 (LE RUISSEAU)

先日、私は溝を綺麗にして解放しました。溝は葦や泥で一杯で、眼に見えない網になっていて、木が生えた斜面で見えなくなっていました。私は、杖で線を引き始めると、水はそこに突き進んで行きました。この様な子供の遊びは、子供よりも大人の方がもっと嬉しそうです。何人かの人が私の手伝いをしに来てくれました。翌日はシャベルと鶴嘴を持って来たので、直ぐに人形のように小さな溝が出来上がりました。水は何年も乾いた儘になっていた以前からの水床を見付けたようです。そして増水して行き、小さな滝になって、歌うような音を出して落ちて行きました。

私は翌日、そこに戻ってみると、私たちの大事業が非常に変化したのを見ました。この自然の小さな仕掛が、一晩中行動していたとしか考えられませんでした。この自由な力が奇妙な結果を齎しました。水床が前日と同じでなくなっていました。小さなダムが作られていて、小さな湖や滝があり、どうしてそうなったのかは良く分かります。浮いていた小枝が、流れを遮っていました。木の葉や藁が堰を大きくしていました。そこに浸透した水は、少し泥のようになって土手を築いていました。そこから水が広がり、切れ落ちていきます。水は落下しながら、堰の足元の大地を掘っていました。この様にして自然の遊ぶ力は、私たちだけで作った産業とは反対の方へ行き、地ならし機のような鶴嘴をものともせず、色々なものを刺繍して来ました。

そのことは私には単純な出来事で、余りに当たり前のように思えましたが、それでもびっくりします。河の流れは決して一直線ではありません。注目すべきことは、河自体が曲がってくねって大きくなり、だんだんと凹面の岸を削って行き、凸状の岸も取り除いて行きます。その様にして河は、平坦な平原ではS状に流れます。人間が行う産業も平等化します。しかし、河は自然にそうなります。多様性を生みます。自然はその儘にして置きなさい。個性が生まれます。

私が作った小さな溝は堰を作り、湖や滝を作りました。色々な風景もこの様に作られるのでしょう。作られたものも直ぐに破壊されるでしょう。堰は水の圧力に屈し、湖は無くなり、もう少し遠くに別の堰が作られました。もしも各々の小さな湖が考える人であったなら、もしもそれが草や空のイマージュをそれ自身として映していたなら、次のように言うでしょう。何故私は生まれたのか。このようにして何故海や大地や国や人間がいるのか、を尋ねる者たちは考えます。放って置けば、形が定かでない塵や霧しか作らないと彼らは考えます。それ故に彼らは創造主を望みます。彼らは、そんなにも多くの溝を綺麗にして解放しませんでした。

(一九〇八年九月十七日)

百五十五 労働者と思想家 (OUVRIERS ET PENSEURS)

汽車は夜を走っていました。突然にざわめきが起こり、皆は村が燃えていると思って見ていました。それは赤い炎を出して燃えているように見える工場でした。雲も赤くなっていました。岩も赤くなっていました。それは子供の口のように赤くなっていました。その強烈な風景は、ひげを生やした布教者を目覚めさせ、彼は説教を始めました。

彼は言いました、「この炎と煙の中で働く人々は他の人々よりも高い賃金が支払われているに違いないが、それは当然のことです。とはいえ収税官や会計係や教授や大臣は、これらの炎と働く槌職人たちよりも高給です。これらの労働者たちが高給であるのは、全てを物語っていると思われます。そして全く当然のことながら、彼らは誰よりも豊かで、最高のベッドや大変に柔らかい安楽椅子を持っているでしょうし、小役人や行商人よりも多くの余暇もあるでしょう。しかし、何でも変わって行きます」。

更に、誰かが言いました、「もしも高給取りになれば、長く働かないだろう。直ぐに経営者や金利生活者になって一日中休んでばかりいるが、そうでない者はその間にかまどの炎で顔を焼いているのだ」。

ひげを生やした布教者は答えて言いました、「彼らが人よりも多い給料を貰っていると言う時、歳を取る前に暇を持て余していたり貯金をしていることを私は期待しません。私が期待するのは、二、三日で一週間分を貰えることです。社会主義国家では、それ以上の豊かさは決してありません」。

別の人が言いました、「そうだな、しかしながら公平でなければならぬだろうし、少なくとも手足が疲労してはいけぬだろう。頭脳も働けば疲労するし、体験していない労働も屢々ある。役に立つ公式を発見する前の数学者は、眠ることも忘れて何週間も探求する。発明家も同じである。何という眼には見えない大かまどだろう、彼らの頭の下からは赤い煙が出ているのだ。友よ、思考することは辛い仕事だ」。

ひげを生やした布教者は言いました、「その仕事について、私は良いことを二つ言わなければなりません。先ず第一は、騙すことは大変に容易であるということです。或る人は、考えて暗誦させるだけです、と言いました。別の人は頭を両手で抱えています。まるで今にも爆発しそうですが、全く何も考えていないのです。〈共和国〉には思想家が沢山おります。そして、そのことはその仕事が良いことを良く証明しているのです。別に、二つ目の話をします。それは、思考することは楽しいということです。創造家たちは時々、食べることも飲むことも忘れます。そうです、それが本当の豊かさです。彼らは何時もこの世の真の王者になるでしょう。彼らの心は何時も喜びと力強さで一杯になっているでしょう。あなたの正義はこれを騙しません。豊かな者に与えるものであり、勝利者賞と王冠を与えるものです。しかし未来の私たちは、私たちが賞や王冠を与える勝利者になるのです」。しかしながら、赤い炎の閃光は消えました。直ぐに皆は眠りました。

(一九〇八年九月十九日)

粗野な人から粗野な人への手紙です。「私たちに見せ場を与えた戦争ゲームが私には大変楽しかったことをあなたはお分かりになるでしょう。多くの人々が敵と味方になって走り、集合したりちりぢりになったりして、鉄砲や大砲を何発も撃ちます。大混乱になりますが、個人にとっての害はありません。何故なら鉄砲の弾も大砲の丸い砲弾も実弾ではないからです。それでも、そのゲームはまるでその音によって、人々を殺したり怪我をさせたかの様に、大変に良く取り決められています。或る時は熱狂的な大声を上げて突進して襲撃し、或る時は優勢な相手の力を前にして後退します。私は、そのゲームのルールが分かりませんでした。そこには恐らく彼らには分かっている威厳を持って決定を下す審判者が何人かいるのです。愉快なのは、この戦争を本物の戦争のように話すのを聞くことです。或る人は大砲の凄まじい炎に驚きますが、少なくとも一つ一つに狙いを定めません。別の人は、一斉射撃が高原に広がって陣地を守り切れなくなった、と言いました。しかしながら私は、射撃手が非常に高すぎる所を狙っているのを見ました。そして私は、或る老兵の話を書き留めていましたが、彼は本当の戦争において指揮した砲台の上で、弾丸の音を聞いて半日軒をかいで熟睡して仕舞いましたが、一人の負傷者も出ませんでした。私はそれらの演習を批判するために言っているのではなく、役に立つと思ったからです。少なくとも、その男たちの話は何時も私を少しびっくりさせます。何故なら彼らはたやすく英雄を作っても決して恥ずかしいと思いませんが、反対に私たちは心の裡では、実際に危険に立ち向かって行ったとしてもそれを決して話さないのが礼儀であるからです。そして、情熱や地位や勝利の上に生まれる理性の働きに関して言うなら、それは憐憫を生みます。

しかし、私は更にもっと驚くことをあなたに何か話したいのです。軍人組織というものは、誰もが分かっている敵に対して向けられており、敵は奇襲することを伺っており、金を払いますが、戦術と機械は秘密です。まあ、敵国の士官たちを来させて、隠していることを全てスパイに教えているのを想像して下さい。そう、もっと強引に夕食に招待して彼らと乾杯し、次の様に言っているかの如くです、「私たちはお互いに或る日戦うだろうが、それでもなお良き友人だ」と。本物の戦争は、彼らにとって一種の宗教的儀式で、人間が神に捧げる供物のようなものであると言うのでしょうか。国民一人ひとりが正義を自ら主張し、攻撃されれば少なくとも自らを守ることです。この様に話している彼らは、私が知る限り率直です。それでも、出会いと殺戮は彼らには避けられないように見えます。彼らはそのことを雨や雷に会ったように話します。二つの国民は等しく学識が深く、正義に忠実であり、理解されなければ殺しに来ることも当然のことと見えます。そのことは彼らが服従を誓った王によって支配されていたかどうかで分かるでしょう。しかし、そうではなくて、私があなたに話すこれらの国民というものは、自分自身を管理しているのであり、統治者たちは世論に従う代理人たちです。私の頭はそのことを見失っています。私は未だ粗野なヒューロン族の人々との戦いの方を愛しますし、そこでは嫌いだったり怒れたりする敵を、全く愚かなやり方で叩きのめしているのです」。

（一九〇八年九月三十日）

百五十七 メフィストはトランプをする (MÉPHISTO JOUE AUX CARTES)

平静にお金を賭けるためには、決してトランプに触れてはならない、という一般的な倫理上の決まりがあります。何故なら、端金を賭けても大したことにはならないからです。勿論、もし端金を賭けて熱中して仕舞うのでしたら、賭博台で白いチップを押しながら賭ける情熱の恐ろしさに目覚めない方が賢明です。

しかし、全く冷静になって、運があるいはかどうかも関心がないのでしたら、その時は向きになっている人間を理解するために一度か二度賭けることも十分為になります。何故なら、むっつりした顔付きで賭けて手が震えることもない人に対して、賭け金が百スーにでもなれば、賭博台の回りに奇妙な動物たちを何匹も発見するからです。品の良さは長続きしません。誰もが期待や恐れや怒りに身を委ねます。

人間を相手にする普通の商売において、前者の冷静な人でもお金のことしか考えず、何時も駆け引きばかりして、隠そうとしたり見付けようとしていたりしています。グランデ神父でさえも隠しますし、わざと口ごもります。非常に豊かと感じて人間の世をすねた犬儒主義が再び演じられます。それは騎兵隊の馬の役割です。もう大して役にも立たないかどうかを、上辺を装った喜劇役者の書割りのような賭けから読み取ることは出来ません。しかし、賭けは平手打ちや足蹴りのドタバタ喜劇です。最早その時、損得は関係なく、私は運任せで考えることは似た者同志の勝負事のことを問題にしており、賭け好きな人たちはお互いを観察しませんし、自分自身を長く見詰めることもありません。自分のことだけ考えます。それは戦争です。偽りの友情には仮面や紅白粉が付いています。悲しむべき光景ですが、時々には純粋な喜びもあります。賭けに反対する友情は良い友情です。

賭けに勝ち続けるとか利益を得ようとする時、インチキをする人々もいます。まさかそんなことはないと思いますが、知らないよりも知っている方が良いのです。新聞を読めば分かるように、至る所に泥棒がおります。高等中学校の仲間内にも、お互いに大変気が合い友情関係を決めるのも、何処にも書いていませんが、殆どそれと同じ調子で生きているように見えますし、大抵何時も泥棒がいるのですが、捕まえるところまで行っていないし、多分良くあることだが高い地位に就いていることもあるでしょう。高い地位を少し人に任せて置いて一人満足して見る眼に変えるには、取分けマキャベリで十分であるとするなら、最高のものを見付けるのも賭けです。そのことは少し残酷です。しかし、時には貨幣を自慢するように、人々を自慢してはいけないのでしょうか。人間の裡には、なんて多くの賈金の人間がいるのでしょうか。純金も良貨も、なんて多くが自慢しているのでしょうか。絶望したくないのなら、自ら悪魔にならなければなりません。世界中の王国は全てファウストに与えなければなりません。山の上へそれを持って行かなければなりません。それというのも、魂というものは売るためのものではなくて、それを知るために悪魔のメフィストフェレスにならなければならぬからです。

百五十八 グランデ神父の亡霊 (L'OMBRE DU PÈRE GRANDET) (1)

私が自分のコーヒーに角砂糖を一つ入れようとする、グランデ神父の亡霊が私の手の動きを止めさせて、次のように言いました。「止めて置きなさい。多分、甘く成り過ぎですよ」。

「分かりました。でも本当に少し苦いのです」と、私は神父に言いました。

神父は繰り返して言いました、「あなたの舌は、少し苦く感じるのでしょうかね。苦く感じないで甘く感じるのは、どの位の量の時なのでしょう」。

「グランデ神父様、あなたがそう言うと、事態は変わりました。もう苦くはありません」と、私は言いました。

「お金のことを気にして言っているのではありません。痛みに苦しんでいる人々のことを考えて見て下さい。キャンベルロットと呼ばれる哀れなフランドルの人々がいますが、彼等は秋になると集団でやって来て、砂糖甜菜をもぎ取ります。露があつたり、雨が降ったりして彼等は体の芯まで濡れますが、まるで水の中で働いていたかのようです。彼等は廃屋に泊めさせられ、藁の上で眠ります。さあ、今直ぐ製糖所や精製所へ行ってみなさい。あなたが眼にするのは殆ど裸同然の姿で釜を煮たり、熱い空気の流れに身を任せている人々です。彼等は登ったり降ったりして、常に動き回っており、雄の驃馬のように砂糖甜菜を背負っています。砂糖を袋詰めしている女たちも忘れてはいけません。手が白くなるからきれいな仕事だと、あなたは思いますか。このきれいな仕事は、彼女らの爪を痛めつけ、指の先の骨まで侵されます。それでもあなたは、砂糖は高価でないとおっしゃるつもりですか。そう言うのでしたら、もっと注意深く物事を見て下さい。あなたは、ほんの少しの時間でも良いですから、あの辛い労働を彼等に代わってやってみて下さい。そうすれば立派です」。

神父は、黙考していました。無情にも、神父の怖い目は世界を照らしていました。更に、神父は私に言いました、「いいですか、先程、私はお金を勘定して砂糖の蓋を閉めたのですが、そのとき私は軽蔑以上のものを感じました。しかしその理由は分かりません。今は、別の利益のことを考えています。そして、けちであることは、恥ずかしいことではないという理由が分かりました。ハンマーで叩いたり、腐った床を修理する時、私は人に頼まず、自分自身でやって見て良かったです。大したお金ではありませんが、私はそれまで沢山の建具屋に仕事を発注していました。しかし、もう決して奴隷を欲しないことにしました。このお金というものは、私が他人の仕事について所有していた権利を具体的に示すものでしたが、その権利を行使しませんでした。従って私は金庫のなかに札束を仕舞い込む度に、奴隷を自由にしていたのです。白状しますが、わたしは何も知らなかったのです。私は金貨の色が好きでしたし、恐らく美德が愛されるためには、悪徳に似たものを理解しなければなりません。しかし、あなたという人が時々他者の幸福について考えたいのなら、お金はあなたに代わって国王の力を示しますし、他者に従属するの

を心に描き、それを用意するために何故お金が美しいのか、あなたはその理由を理解するでしょう」。そう言って、神父は姿を消しました。私はコーヒーを砂糖抜きで飲み、それで美味しいことに気づきました。

(一九〇八年十月二〇日)

(1) ガリマール社のプレイヤード叢書『プロボ集1』にてモーリス・サヴァンが付けたタイトルは「砂糖抜きコーヒー(CAFÉ SANS SUCRE)」である。

百五十九 善と美と儀式 (LE BON, LE BEAU ET LES RITES)

私はブルゴーニュ地方の葡萄園経営者と会いましたが、彼は今年の輝かしい実りの秋に大変満足していました。二倍の収穫量に喜んでおりましたし、葡萄も良く熟成していました。私たちは量にも質にも満足するでしょう。「商売も上手く行きますね。販売するには本当に良い品質ですし、最高入札者が落札して、誤魔化しは無く、大袈裟に話すこともありません。それが本来の職業です」と私は彼に言いました。

彼は私に答えて言いました、「そうです、職業とは本来誰かのために、有名な葡萄の産地を維持する者たちのために、そして繊細な味が分かる人々に販売するためにあります。勿論、直ぐにつまらないワインをまあまあの値段で最良のお客に売りたくなくても、あなたはやり甲斐がない仕事とは思いません。或る値段以下だと、最早評価されません。普通のワインもそうでないワインも決して区別されません。私たちや葡萄園経営者たちにとって、つまらないワインも各々が彼らの顔なのです。或るワインは辛口であるが温かい感じがするし、別のワインは豊穡で甘口です。同一の葡萄畑でも、年によって変わります。私たちは春も夏も秋も飲んで味わうだけです。しかし、お客たちは味覚が分かりません。分かっても適当です。色々な色彩が豊富に沢山あると、舌の上でも灰色になり分からなくなります。同様に、味覚も習慣でしかなく、味が変わると気に入らなくなります。彼らお客たちは、一つの味しか知らないのです。私は昨年と同じワインを望みますし、値段も同じであることを望みます。あなたは盲人に色彩のことについての話をしますか。お客たちが注文するものなんか無くても、私たちはそれをでっち上げます。お客たちは可もなく不可もない普通の製品を望んでいるのではないのでしょうか。まあ、私たちは生産地と年に拘りません。太陽が笑っているか、ふくれっ面を見せているかです。太陽が十分に気に入っていたか、十分でないかですし、私たちは何時も平凡な同じ味に混ぜて、お客たちに販売します。本当です、人々は習慣や型に嵌まって生きているのです。良い味に興味なんかありません」。

私は彼に言いました、「美の趣味も同じです。理由が同じです。人々は事物よりも言葉で思考します。実際に喜ぶことよりも、人々の評判がどうであるのかを気にします。勇敢な人間は、食堂をそれなりに飾ろうとそれ用のサイズの絵を探しました。彼は自分なりに飾る高さを決め、他の多くの人々が考えている高さでは高すぎると独りで言っていました。他の多くの人々はワインは水差しの中にあり、居間には安楽椅子があり、壁には絵がなければならないのです。それ以上

は最早考えません。彼らはワインを味わいません。安楽椅子の居心地が良いかどうか試そうとしません。平原に向かって開かれた窓、夏になると開かれる窓のように、彼らは絵を活用しません。そうなのです。彼らはテーブルがテーブルらしくあれば十分であり、居間が居間らしくあれば十分なのです。儀式が行われているのです。私は、大変に裕福な人々を知っていますが、食べるのが大変に下手で、そのことを改めようとしません。しかし、メニューの見かけは良いのです。それが金持ちのメニューです。彼らは言葉を食べるのであって、皿に盛った料理ではありません。

ビーバーが大変に安全な檻の中におりました。ビーバーは退屈していました。或る人が湿った土を少し与えようと思いました。ビーバーは誰の力も借りずに土を捏ね始めて、壁を築き始めました。満足そうでした。このビーバーは大変なブルジョワだったのです。人々の評判を恐れていたのです」。

(一八〇九年十月二三日)

百六十 生徒だった教授 (LE PROFESSEUR QUI A ÉTÉ ÉLÈVE)

作業組織について討議している教授たちが、そこには三十名程おりました。彼らは全員が大変な博識家で、一人ひとりが学問に精通していました。そして、習得したことを弁えずに生きる精神とは無縁でした。従って彼らは、各人が自分の方へ一週間分の知識の断片を引き寄せながら、引っ張り合っていました。語源学の先生は泣き言を言い、運動学の先生は不平を言い、ギリシア語の先生はふくれて、健康学の先生は他の誰よりも怒っていました。法律学の先生は長広舌をふるっていました。でも全て最後には礼儀正しく終わり、三角帽子を被って法服を着ているようでした。

要点を繰り返し述べるなら、生徒たちは朝の八時から十時までと、午後の二時から四時までの授業を継続して受けているのが分かりました。母親たちは一時間毎に五分間の小休止を小間切れに取っていたとのことでした（何故なら皆が大将で、統制が取れない集団であるからで、共和制なのです）。誰もが哀れな微笑を作って、無駄なこの五分間を大目に見ていました。優れた制度とはそのようなものでした。

毎日の四時間に首を突っ込んでいる者たち全てにとっては、余りにつまらないものでしたので、小休止後には何時も十時から正午までクラスの授業を生徒たちは受け続けなければなりませんでした。この授業は講義と呼ばれていました。というのも、そこには約束事が求められていたからです。上手く原状に戻さなければならなかった木曜日の朝の授業も講義と呼ばれるようになります。授業以外の自己啓発のためには、自分で確実な時間を作りました。夕方五時から八時までの学習のための三時間は、誰もが満足すべき時間として無駄にならずに持ち続けられました。「何故なら、少しでも連続して考察する勉強は、少なくとも三時間はたっぷり必要であるからです」と集会の重要人物の一人が言っていました。

最後に、先生の素人のような人が逆説を言っているのが聞こえました。彼は言いました、「皆さん、あなた方には弟子がいなかったのが良く分かります。私には弟子がおりました。二時間の授業では二十分間は大変に注意して聞きましたし、そういうことが毎回あることを私は大変良く思い出します。フランス語の先生は文学作品に十二時間の勉強を求めています。しかし、現実には四十五分間で片付けられていました。私としては瞬間的に考えました。残った時間は人物画をデッサンしたり、小説を読みました。今日、私がそのことを考えて見ると、この気まぐれな方法はそんなにも悪くはなかったと思います。それに、最も力強い精神でも、同じ質問を十分間も注意した時には力尽きて、心が動揺したり、気晴らしを自分に与えるに違いないと納得させられます。もしもそのことに用心しなかったなら、直ぐに間違った無為な瞑想に陥ることでしょう」。こんな悪ふざけを言う人は、殆ど聞いたことがありませんでした。授業計画はその儘でした。人々は立ち去る時、肘で突きながらこの変わり者の様子を示して、次の様に言っていました、「嘗て、生徒だった教授があそこにいるよ」。

(一九〇八年十月二四日)

百六十一 観念が恐怖を生む (LES IDÉES FONT PEUR)

観念には或る種の暴力のようなものがあり、それには殆ど友人がいないように見えます。そういう気持ちで握手を求められても、時々少し恐いです。私は〈普通〉列車の三等席にいました。そして線路が混んでくると、どんなことが起きるのか私は知りません。何台もの特急列車が光る流星のように通り過ぎて行く間、私たちの列車は家畜貨車に混じって停車した儘でした。

私の前に座っていた人がその時、独り言を言うように言いました、「びっくりだ、大金持ちの連中は時間を浪費するために特急列車に何時もいるようなものだが、働きに行く連中は潮の流れやサクランボウを運ぶ時よりもゆっくりだ」。

私は考えを口に出して、彼の考えを続けました。私は言います、「もっと沢山のことがあります。特急は多くの場合、大変無為な時間を過ごすことが殆どです。座席を取った大部分の人々はジャーナリスト、視察官、知事、警官、士官、代議士、巡業中の俳優たちで、誰もが少し高い料金を支払います。その結果、一緒に乗っている仲間の連中は急行に乗る予定ですから、お金を損します。そのお金は商品に上乗せされます。それ故に、もしもそれ程速く行かなければ、全ての移動をもう少しゆっくり行えば、高い金額にならずに済みます。商品の値段も哀れな人々には安くなるでしょうし、距離は変わらないのです。実際に、貧乏な人々は金持ちのためにお金を支払います」。

その人は耳が聞こえない振りをしました。多分、物静かな人で大変に長い間黙っていて、考えているようでした。多分、不公平を考えることは、不公平そのものよりも我慢するのが難しいのです。あるいは思考の遊びは、金属の球を転がして標的に当てる恐ろしいペタンク遊びです、九本の柱を倒す九柱戯の遊びと同じであり、球を戻して競技者が屢々やり直すのは別にしても、見物人をがっかりさせるのは良くあることです。要するに、彼は決して遊びたくありませんでした。

他日、私は市内電車の後部座席にいた時、大変気の毒なことに男と女が沢山の駕籠を持って乗り込んで来ました。私は礼儀正しく女を助けて駕籠を積み重ね、そして座れる席が奥の方にあると教えました。男は私にお礼を言いました。彼は大変年老いた老人で、軍隊式の山羊ひげが生えていました。私は思わず感情に駆られて彼に言いました、「働く人々は、そうでない人々よりも多くの権利がありますし、暇人は少し席を詰めれば良いのです。食べて行くにはそれでも十分です」。

既に微笑していた彼の顔は眼の前から消え、最早私には構っていませんでした。恐らく彼は、親切を愛していたのですが、公平には恐れていました。

観念の見世物師である私の友人たちは、熊使いに似ています。あなた方の回りに人々は輪を

作り、子供たちは首を伸ばしています。もしも熊が少し大きく動けば、人々の輪は広がり、母親が小さな子供を抱えて行くのを眼にします。その晩、「八時に寝に行きたくない小さい子は、熊が食べて仕舞うのを知ってるね」と言われます。そんな具合に〈博物学〉が教えられます。

(一九〇八年十月二五日)

百六十二 正直と信用 (LA PROBITÉ ET LA CONFIANCE)

私たちは市内電車に乗っていました。乗務員が運賃を貰っていました。或る人が言いました、「ノルウェーでは電車に車掌がいなかったなあ。募金箱のような物があって、旅行者は二スー入れていたんだ。彼らはお互いに自分を抑制していたとまでは言えないなあ。何故なら旅行者一人ひとりは二スーで乗り換えることが出来るし、何時も切符が無いから分からないのだ。要するに払いたい人が払っていたんだ」。

別の人が言いました、「あなたは別世界の月のおとぎ話をしているのだ。もしあなたが気分を悪くしないなら言うけど、あなたが遠くから来た男なら、私はあなたを信じないと思うよ。馬鹿じゃないの。人間はここにもいるし、何処にもいるよ。彼らは与えることよりも貰う方がよっぽど好きだ。だから電車の募金箱は諦めてくれ。一日経てば分かるよ」。

私はその人に言いました、「しかし、貧しい人々のために募金箱はありますし、一杯になります。人々は義務でもないのに自由に与えるのだから、何故義務である運賃を放って置いても支払わないのでしょうか」。

三人目の人が発言しました、「信用は、泥棒がいるのが原因になっていると言われている。それは何もしない怠惰が勝つ悪い信用が齎され、殆ど信用は悲しいと私は言だろう。しかし、幸福な信用は愛する信用であり、正直と呼んでいる。前科者を真に更正させるために雇用している薬剤師と私は知り合いになったが、半数は売春婦のひもで、半数は泥棒だった。そうでない者は一本の煙草や一杯の酒のためにその仕事に就くのであり、一スーでも決して使い込んだりしなかったのだ」。

最初に話をした人が再び言いました、「同じ様な経験を私も思い出すなあ。そこは波止場で、大変安全な小島だったが、周りの海は霧が立ちこめていた。遅い時刻だった。哀れな男が私に二スーくれと言った。私は二フラン・コインを一枚しか持っていなかった。彼は釣銭を探してくると言い、私のコインを持ちながら走って行って仕舞った。全てが一瞬の出来事だった。彼の影が夜の中に消え、私は自問した。人を信頼するというこの馬鹿な行為は、それでも二フラン分の価値があるのだろうか。彼が私のお金を持って、走りっぱなしで戻って来た時、私はこの間違った考えを大変後悔したんだ」。

私は強盗の話のことを言いました、「そこです、物事を普通に見てみましょう。新聞売りは、小さな木造の小屋で半分眠っています。そのことを知っていても、決して盗まれません。そのことが証明しているのは、強盗でも正直になるということではありません。何でも同じことです

。戦争は戦争を育て、疑念は或る種の弁解を泥棒に与えます。人間は元々野蛮で、次第に戦争を産みます。平和は築かれるのであり、同じ人間がそれを持ち続け、喜びます。困難は出発することであり、飛行機が飛び立つのと同じです」。

(一九〇八年十月二九日)

百六十三 大臣たちの学校 (L'ÉCOLE DES MINISTRES)

私は海軍省大臣になった夢を見ました。次々に船旅をして、晴れた朝に或る海軍工廠に下船しました。そして、建造中の戦艦に到着し、勤務中のエンジニアを探しました。立派な職工長が私に言いました、「彼は九時半に来ます」。正式には八時に勤務が始まっていたので、私はそのエンジニアを三十日間の停職にしました。

時間よりも早く来て働く者はおりましたが、遅れて来て働く者はおりませんでした。そんな鋳打ち職人は聞いたことがありませんでした。小さな製鉄所は順調に行っていないように見えました。私は「何故、今ここで働かないのか」と尋ねました。彼は労働者に相応しくないように見えました。お手上げです。

もう少し離れた所に、私は古いレールを運んでいる集団の人々を眼にしました。彼らは十人ずつになってレールを運んでいましたが、速くありませんでした。私は「日給を支払っている人夫はそこにいるのですか」と尋ねました。「今のところ鋳打ち職人たちはやるべきことが何も無いが、我々は忙しい」と私に答えました。

私は動じることなく、何時も夢の中に戻ります。何故、鋳打ち職人たちが鋳を打たないのかを私は知りたいと思いました。最後に白状して言ったのは、大きな仕事を期待していたのであり、所謂、一日仕事に熱中出来ないということです。私は「よろしい、でも遅れたのであるから懲戒があります。請負契約書を見せなさい」と言いました。事務所から事務所へ駆け回ってついに私は、そのような時には懲戒があることを告げますが、適用されたことはありませんでした。私は、そのような決定ばかりしていた妥協的な官僚を見付けなければなりません。或る者は一か月前からフランスの別の僻地で仕事を行っていました。電報があつて助かりました。彼は休暇を取っていたのです。彼は呼び戻されました。監督をしなければならぬ上司たちも又忘れないことが重要です。書類を読まないでサインしたり、何も点検しない検査官がいます。かくして委員会は耳が聞こえず盲目になります。各人は酷く叱られました。誰も何も引っ張られずに、沼地のようにどろどろした嫌悪すべき中で選んだ新しい住所を手に入れていたのです。

五つの軍港(1)がそんな風でした。私には翼がありました。何処にでも降りました。恐れられて幸福でした。私は自分の実力を感じていました。既に、議会からは喝采して迎えられると思っていました。幾隻かの船艦が、将来は遠くの海にまで私の名前を知らせるようになると思っていました。しかし、私の夢は悪夢に終わりました。国家主義的な新聞が、私は祖国を裏切ってドイツに売ったと書き、その上、朝から晩まで酔っていると書きました。小新聞は、私が魚雷艇の代

わりに洗濯舟を手に入れた噂を語りました。私の命令でテスト航海へ出発した一隻の船が岩にぶつかったので、そのことはとことんまでやりました。退職金を受けるようになった将校は、公然と大通りで半殺しにするつもりで私に殴って来ました。そして、少しは人も羨むこのポストを誰かに譲ろうと考えたその時、議会は大きな力となって憤慨し、私を在野へ放り出しました。その時に私は目覚めました。牛乳配達人と街路掃除人夫が、窓の下で大声を出していました。

(一九〇八年十一月一日)

(1) 五つの軍港とは、シェルブール、ブレスト、ロリアン、ロシュフォール、トゥーロンである。

百六十四 統計学 (STATISTIQUE)

社会学はまだ生まれたばかりの学問で、泣き声しか聞きませんが、統計学のお陰で成長し大きくなるでしょう。教授たちは誰でもそのことを知っていますし、受験生たちも皆同じです。大衆は中身の無いこれらの方法に殆ど興味がありませんが、それは間違いではありません。このレッテルの多くは、つまらない商品を包み隠します。そして、それはあるが儘のものをもっと良くする方法ではありませんし、精神を愚かにします。

私は死者崇拜についての統計学の本を読んだところです。やるべきことは単純で、最早何もありません。墓地の入口の数が数えられます。年間に墓地を訪ねる人の数を見積もります。既に、そんなことをするのは役所でしかありません。しかし、私が読んだ論文は高度な社会学に狙いを付けていました。死者崇拜は、宗教的感情と結びついていたかどうかを知ることが重要でした。初期哲学の場合は、前提となる多くの考察の種をその中に見付けます。というのも、死者のために行う墓参りは死者のことを考えるのを、時には良く示していると心に思うからです。これらの墓参りは、人々に花を買うお金を持っているか、暇な時間があるかということも示すことが出来るものです。しかし、社会学者たちは、自分たちのための良識を持っています。彼らは報告を抽象にまで高めます。性格や状況に注意を払いません。彼らは自分で言うように、事実の中の法則を探求します。それ故に、そこにあるのは紙に書かれた見事な記事であり、数字の羅列です。年間の墓地への埋葬で、無宗教と宗教的埋葬の比較を統計学上行うのは大変に簡単です。まさにそのために、私たちは宗教的感情の変化についての情報が与えられます。既にここには、哲学愛好者の雲が層を成しています。〈神〉や〈悪魔〉を信じないで、白衣や十字架を身に付けて屢々やって来る、と彼は言います。しかし、社会学者は土を盛って高くする人々を軽視します。鳥のように滑翔させます。最早それらの相違が見えないように大変に高い処へ行きます。そして、以下は鷲の眼のように認めるものです。無宗教の儀式が最も多い墓地は、年間に墓参りする人も最も少ないものです。結論です、死者信仰は神仏信仰と同時に衰弱します。

それは本当でしょうか。間違っていないですか。それは本当であると私は思います。多くの理由が与えられるでしょうが、一人ひとりの良識が判断することです。しかし、私は問題になってい

る統計学に助けを求めません。同類であるということは、何も証明していません。無宗教の葬式が特に哀れな人々の家で行われ、哀れな人々が平日に墓地へ行く時間が無いということを知り得るのは、社会学ではありません。そこには統計学では証明出来ないものがあります。

この例が証明していることは、人は多くを知ることが出来るが、大変な間違いも犯すということです。事実は壺の中の水のようなものです。水の形は壺の形をしていて、その事実は統計学者の記事で一杯です。事実をよく調べるには技術が必要です。そして事実が与える解答が正しいのは、質問が適切なのです。

(一九〇八年十一月八日)

百六十五 天国、地獄、煉獄 (PARADIE, ENFER, PURGATOIRE)

あなたは墓地に何を求めに行くのですか。そこには古い衣服と棺桶しかありません。死者たちは別の処にいます。或る者たちは天国、他の者たちは煉獄、その他の者たちは地獄です。それは何処でしょうか。あなたの周りの地上です。

今、生きている人間たちは皆死者から戻った者たちです。全ての人間が、若い肉体で古い外観から抜け出たのです。誰もが少なくとも犁を押して耕している第四紀の赤い泥土と同じ位に古い思い出を引きずっています。人間というものは、大きく成長した人間の種であり、人間の種というものは人間になる前の部分です。今は人間であっても、ずっと前から大変に単純な生物は海で生まれたとは殆ど想像出来ないで生きています。私たち人間が生まれようとしている年代を数えようとするのは止めましょう。訳が分からなくなります。

それ故に、私たちは大昔の生命を引きずっているのであり、或る者たちには曙の光の中の楽園であり、他の者たちは同じ太陽を浴び、同じ星々の下にありますが、全てが同じ眼をしている訳ではありません。そうです、もし心の中に後悔も憎悪もない世界に何らかの正義があるとするなら、単に自分自身を自由にする気高い愛ばかりでなく、そこには本当の楽園があります。その人にとって太陽は何時も美しく、そして星々と愛も美しく、泉はこんこんと湧き出て、海は猛り狂っています。しかし、世界を明るくするこの喜びを如何に描くのでしょうか。ダンテ自身は楽園を蒼白く描きました、何故なら地獄の底にそれを見たからです。もしも乳児期に戻れたなら、何年もの時間や間違いが激しく風に揺すぶられて、失われた楽園を恐らく発見するのでしょうか。

私としては、何時もヒドラと戦い、何時も手にしたずだ袋を空にして、そして他のずだ袋を満たしながら、最良であっても決して評価されない喜びに結びついた煉獄の魂しか私は知りませんでした。何時も盗みに反対する泥棒になり、嘘には方便を、怒りに反対して怒りを、そして恐怖には勇気を持ちます。こんにちは、友よ。光は雲の上にあります、道は曲がっていて殆ど登っていません。彼らは何をしているのでしょうか。火を燃やして、暖まっているのです。しかし、その火が本当の太陽であると信じるまでにはなっていません。

他の処からも火が付いて燃えています。消してはならない情熱があり、決して犯してはならない間違いもあります。それというのも、これらの情熱は火事のようにそれ自体で増大して行くからで、お前は酒をもっと飲み、これからも飲むでしょうし、首につけた宝石のようにお前の間違いは底まで円を描いて引っ張って行きます。その時、お前は最早正義という本当の太陽を見たいとさえ思わないでしょう。それは情熱の火であり、本当の太陽だ、とお前は言うでしょう。正しい人は欺され、最も不公平な不正が勝利を収めて本当の美になる、とお前は言います。その時、そこにいる人々は恐らく、全てを失うでしょう。「そこに這入るあなたは、あらゆる希望を見捨てない」。そうです、あなたが子供に生まれ変わった時は、もっと悪くなります。病気になったり、狂人に生まれ変わります。そこにあるのは、最悪の地獄の悪循環です。

あるいは多分、残りの時間と共に、あなたに天国を与える処女の愛によってあなたは救われます。そこから、まあまあのアダムとイヴや新しい地上の樂園を生みましょう。古い罪は埋められます。そして誘惑して来る蛇は、絶望という自分の尻尾に噛み付くのです。

(一九〇八年十一月十日)

百六十六 アランはアランに言う (ALAIN DIT À ALAIN)

アランはアランに言います、「もう少し私を高く飛ぶようにさせて下さい。この耕作人は既に蟻のようにぎりぎりまで太った。しかし、お前は大地を削り、山の方へ土竜の巣穴を掘ることしか適していない。舵を取って方向を決めなさい。驚になって風景を見ている私たちは、王様になって考えるだろう。新しいもの、大胆なもの、楽しいもの、慰めになるものを、この大地の上で私に見せて下さい。バスや空飛ぶ機械のように、奇跡が皆を豊かにすると私に信じさせて下さい。多分、金持ちになるために働く貧乏人を助けることは出来ないし、ご馳走が多くあればある程、恐らくパン屑も多いだろう。習慣のことも考えて下さい。不公平も習慣であることを考えて下さい。〈教会〉が発明者たちを焼き殺したことを考えて下さい。お前は修道士や宗教裁判所判事に成りに行くのだろうか。我々の翼を潰しに行くのだろうか。そうではない。時間が経てば飛びなさい。誰でも直ぐに飛行機に乗るでしょう。それまでの間、私の話を滑空させて置いて下さい」。

アランはアランに答えます、「もしもお前が望むなら、飛行機の舵を取りなさい。もしもお前が望むなら、金持ちに成るために考えなさい。代議士に成れば良い。アカデミー会員に成れば良い。個人であるのを忘れろ。国民の喜びと財産を計算せよ。直ぐに職業が皆を孤独にさせることも忘れるな。機械の主人たちはお前を愛するだろう。誰もがお前を愛するだろう。何故なら彼らは全てを望まないし、心の底では和解したり、眠ることしか望んでいないからだ。それ故に高く飛ぶことを考えよ。お前の邪魔をするのは誰か。私は空気のように軽く、お前は操縦桿の上に少なくとも私の手を感じていない。私は良い結果を得るだろう。私はお前が空を飛ぶための車輪やハンドルを発明するだろうが、出来が悪い限りお前もそれをしなければならないだろう。少な

くとも私は女中たちを望んでいない。お前はそこで何も出来ないし、私も出来ないのだ」。

(一九〇八年十一月十一日) (1)

(1) テキストは〈十一月十二日〉になっているが、アラン研究所が刊行した全集によるとルアン新聞に掲載されたのは〈十一日〉が正しいようである。〈十二日〉に掲載されたのは、「司祭たちの偽善 (HYPOCRISIE DES PRÊTRES)」というプロポである。

百六十七 枯葉と氷結 (LES FEUILLES ET LA GELÉE)

或る朝、大変に凍てつく夜が明けた後、私は少し尋常でない光景を見ました。大きなとねりこの木が、一枚の葉もつけずに落葉していました。幹の周りは、見るからに奇妙な緑色の絨毯のようになっていて、歩くと風変わりな音を立てました。私たちは、枯葉の上を歩く習慣があります。葉は、大変に生き生きとした緑色をして柔らかで、そして生命力に溢れていました。私は、見るからに森の年老いた熊に似た人と一緒に散歩していた時、彼に言いました、「熊じいさん、これらの葉はどうして十一月でも未だ緑色をしているのでしょうか」。

彼は答えて言いました、「私は良く観察したが、それらの葉は秋になって乾燥してきて、日に照らされた時に、ゆっくりと黄色くなるのだ。その証拠に、日に照らされていないと葉は黄色くならない。それに、どうやらそのようだ。太陽は葉を乾燥させながら、幹や枝を通して水分を上昇させていると寧ろ私は考えている。こう言って良ければ、このたっぷりとした水分には堆肥となるエキスが一杯あり、まさしく葉の中で緑色の成分になり、植物の化学として本質的要素となるものである。反対に、もしも太陽が雲に隠れて、樹木が湿っぽい水蒸気に包まれるなら、水分は最早葉の上で乾燥できないだろう。堆肥で一杯の水は、蒸発するために登って来ないだろう。緑色のものは使い切る。植物は生長を止め、黄色い葉になる。だから多分、葉を黄色くさせるのは秋の湿気である。同様に、寒さでもないことをあなたは分かっているのだから」と言って彼は私にその時、緑色の葉を見せながら、「寒さは落葉させるが、黄色くさせない。ここに寒さという斧がある。枝から葉を切り離すものだ」とつけ加えて言いました。

彼は、各々の葉の付け根の葉腋（ようえき）の中に、斧の形をした氷のように冷たい小さな刃を私に見せました。「これが何か、私は知っている。薔薇色の水が葉腋の穴に集められ、再び緑色のスポンジ状の組織にしみ込むのだ。寒さがやって来る。その時、水は氷に変わって膨張する。枝から葉を落とす氷の楔のようなものになるのだ」と彼は言いました。

私は彼に言いました、「何故だろうよりも、そうなんだと思います。こんなことは珍しいことです。しかし、あなたはご機嫌ですから、熊じいさん、何故こんなにも早くこの美しい秋が冬の顔をしているのか、私に教えて下さい」。

彼は言いました、「おお、私が何でもはつきりと見えるためには、それは大変に遠い処から生じているのだ。しかしながら、私は十月の明るい空を見ながら、毛皮のコートから抜け出たのを覚えている。年老いた大地は太陽がもっと良く温めるように、雲を追い払ったのだと私は思った

。それは決して夜を許さない。大地が再び冷たくなるのは、明るい夜を通してだ。しかし今、昼は短く、夜は長い。雲も無く散歩をするようなもので、大地は非常に得るものもなく損をしている。それ故に今、十月の美しい日々に報いなければならないのだ」と、体を温めるために足をばたばたさせて、彼はつけ加えて言いました。

(一九〇八年十一月十八日)

百六十八 坑内爆発 (LES COUPS DE GRISOU)

鉱山技師のルザンプル氏が私に言いました、「坑内でのガス爆発は予知されるべきことです。鉱山で大事故が起きるのは、他のことも同時に起きていることに私は気付いたが、このことは私独りが言っているのではない。気圧計の低下や大地の激しい振動がある。これが不可解に一致して起きる時は、やはり注意するのが賢明だろう。農民は単純な目印を見付けて天候を大変良く当てが、それがどんなメカニズムになっているのか分からなくても、その目印は雨や霜に結びついている。私があなたにお話した関係も、確かに偶発的なことではない。そのことは子供も理解するでしょう」。

私は彼に言いました、「地面の震動、地滑り、地盤沈下が新しい罅を作り、そこから坑内ガス爆発の新しい原因が鉱山に生まれるのを理解するのは、そんなにも難しくはない」。

ルザンプル氏は言いました、「圧力や摩擦で生まれる熱によるこれらの地面の活動が、坑内ガス爆発の発生にもよく働き得る、と私も十分信じている」。何でも構わないのですが、大地の外見上の異常な活動は全てを警告と見做して良く、疑う余地はありません。その時は、嘗てない程ランプの明かりや坑内ガス検知器や換気装置を監視しなければなりません。その上、この監視は坑内ガス爆発がゆっくりと起こるべくして起きるような時には十分に役立ちます。しかし、もしも気圧計が急激に低下した時に良くないことが起きるのであるなら、私たちは万が一を考えて慎重に外へ出るでしょう。理由があるのですから。

私は彼に言いました、「何が起きるのか見抜くのを私に任せて下さい。井戸の穴にある気圧計が低下した時には、頭上の空気が少しばかり軽くなったのだと言いたいのです。それ故に鉱山の井戸においても、上方へ引っ張られるピストンがあるが如く、全てのことが行われて行きます。その時、必然的に井戸や坑道の中で起きるのは、気圧計が早く低くなるのが明白であるだけに、一層地の底から地表へ空気が吸い込まれて流れることになります。その時、新しい罅割れから漏れてやって来るとか使われなくなった坑道に溜まっている坑内爆発ガスが、誰も決して待ち望んだりしない嵐を引き起こします」。

ルザンプル氏が言います、「全くその通りだ。まさしく大地の活動や空気の圧力は、大地の至る所で多くの予兆が観測されるし、二つの原因が重なったり活動が停止すれば、何時間か前に予想することも大変容易になる。それは私が管理していた鉱山でもやっていたことだ」。

「もうやっていないのですか」と私は彼に言いました。

「やっていないのだよ、君。私は追い出されたんだ。そして、その理由が私には全然分からなかったのだ」。

(一九〇八年十一月二四日)

百六十九 若いクリスティアーヌと嘘 (LA PETITE CHRISTIANE ET LE MENSONDE)

私の若い女友達クリスティアーヌは十五歳ですが、既に哲学者のように考えます。外見上はすっかり大人です。骨付きのあばら肉、上手に盛られたビフテキ、鶏肉のソテ、兎のパテという料理が彼女に出されます。彼女は、原因を遡って考えざるを得なくなります。生きている動物のことを考えます。彼女は、走っているのを見ます。猟師が動物にとどめを刺す時とか、料理人が喉を切る時に出す叫び声を聞きます。

彼女は哲学者のように考え、そして伝道者のように大変上手に話します。彼女は決して行動しません。人が与えるものを食べます。彼女を取り巻く人々には罵りません。野蛮に扱いませんし、残忍にも扱いません。あるが儘を言って満足します。もし小海老を食べるなら、「殺されたのね」と言いますし、バターやオリーブを見ながら「殺されなかったのね」と言います。最初、人々は笑うしかありません。しかし、直ぐに誰もが望まなくても言葉以上のことを思い、そして想像して一つのことから多くを非難していました。「黙りなさい、クリスティアーヌ。私たちは楽しんでいるのだから、構わないでくれ」。これに若い女性伝道者は答えて言います、「あなた方の楽しみに私は何も反対しませんわ。私は真実を言っているのです。鶏肉は大変に旨いとあなた方は言います。私が言っているのは、それは殺されたということで、誰も本当でないようなことを言っているのではありませんわ」。

この話から私はイブセンの『野鴨』のことを考えました。そこに見るのは〈理想の主張者〉であり、真実に生きたいと思う人であり、その名で呼ばれたい人です。少なくとも誰もそんなことは望みませんし、それが真実です。誰もが虚偽を生きます。部屋には、お金のために品もなく結婚した時の写真があります。それを恋愛結婚であると呼ぶことを誰もが強く主張します。写真に写っている屋根裏部屋にいる父親は酔っ払いの老人で、バケツと一緒に野鴨を閉じ込めました。そしてバケツを持って降りるために板で美しい道を造りました。その野鴨は幸せな野鴨であると言わねばなりません。もしそのバケツを池に持って行ったら、野鴨は本当に幸せでした。要するに〈理想の主張者〉は、自分だけが幸せでも皆の不幸を生むのです。

確かに、可愛いクリスティアーヌよ、私は料理人の嘘を愛します。あなたは今でも鶏だけに涙を流しますが、気を付けて下さい。真実というものはあります。私たちは毎日、人間の肉を少し食べているのです。大変上手にそれを私たちに料理してくれます。お皿の料理に唾を吐くのは止めましょう。それ故に、皆のように時間があってのんびりすることが人間には一番有益です、金持ちの贅沢がなかったなら、労働者は仕事がなくなって空腹で死んで仕舞います。正直に言って仕舞いましょう。真実とは少し苦く、一つの嘘が料理を大変に美味しくします。私たちの友人フ

イレアスが言うように、宗教は最悪の場合、何時も私たちに欺した儘にして置くことが良いのです。もしも宗教が他人の人生に救いを与えなかったなら、その人に食欲を沢山与えて食べることを手助けすることでしょう。

(一九〇八年十一月二六日)

百七十 田舎の大所有者 (LA GRANDE PROPRIÉTÉ A LA CAMPAGNE) (1)

土地の大所有者は小所有者を食い尽くします。社会主義者たちの話は、殆どこのことを断言しているのが分かります。彼らは小所有者全体や、資本家の権力に収用された小主人全員を私たちに理解させて、プロレタリアの軍隊を大きくしに来ます。でも現実には事態は全く別に起きています。

最近、或る農民が私に言いました、「田舎で土地を大きくする人は破産する」。そして私にその理由を大変良く説明しました。田舎で賃金を貰うサラリーマンは、主人の家に住みません。殆ど何時でも結婚して、仕事と帯状の土地と僅かばかりの庭を手に入れますが、小さな家であることに変わりありません。もしも大地にある木の根が取り除けなくて耕作出来なければ、その時は町へ出掛けて行くか、県鉄道で仕事を見付けに行きます。要するに、田舎のサラリーマンたちは、自分の土地を殆ど持っていませんし、余った時間で土地を賃借しているのです。大地は良く耕作されています。何故なら、誰もが自分の仕事のやり方を知っていますし、大地を愛しているからです。

今から、カラバ侯爵になりたがっている野心的な資産家の後を追ってみましょう。彼は狭い畑を次々に購入して、資産を増やして行きました。そして値上がりします、何故なら狭い畑の土地は何時も欲しがられていますが、供給されるのは稀であるからです。それは周知のことです。売られる土地が小さいのに応じて一ヘクタール当たりの土地の価格が上がります。それ故に彼は大変高額で購入します。非常な高値に値上がりして購入します。というのもずる賢い農民は立場を利用して、〈呑気な〉粉屋を演じて売りたいくないように演じるからです。

彼は大変高く購入しますが、境界が広がるのに応じてその土地は価値を失います。サラリーマンたちは狭い土地にしか住み着いて落ち着きませんし、無人化します。何故なら皆角地にいるからで、角地は中央の広い土地同様に、早くは増えないからです。それ故に人手は余りかかりません。値は上がりますが、所得は下がります。大所有者は、平原や森や草地を直ぐに贅沢なものに見做します。彼は他の収入を探します。土地を売りたいなくなって、大変安く売ります。何故なら角地の買い手が見付からず、二束三文になって仕舞うからです。もしも安く売らなかったなら、肝心な点ですが、誰も買いたくなくなります。カール・マルクスの予言に反していますが、以上が理油です。それは大所有者がお金を出して取り囲み、弱らせてついには損をしても買い上げて仕舞うのです。この資本は金庫の中に入れて置きません。それは太陽に見せています。そして見せながら、ことの成り行きで細分されます。土地は金塊よりも公平です。

（一九〇八年十二月一日）

（１）実際、自作農の人数（経営者の六〇％）が優勢であっても、土地所有者が非常に集中している事実を隠す必要はない。フランスの土地の半分は、二〇ヘクタール以下の四〇万人の所有者が所有しており、土地相場全体の三％でしかない。それ故にフランスには、この〈田舎の民主制〉はなかったのであり、その時代の話や小説に出てくる捏造されたイメージであった。

百七十一 タラマとジャンヌ・ダルク (THALAMAS ET JEANNE D'ARC)

タラマ教授(1)は〈家長同盟〉がソルボンヌ大学までその監視を広めていると指摘して(2)、嘗て非難されたことがありました。それは歴史を理性的に捉えようと思う時に表れることです。政治的理想を守るために私たちが古文書から引用した議論しか生まない限り、司祭たちは絶好の機会に恵まれることでしょう。

歴史が何でも証明していると信じるためには、歴史家の仕事によって変えられなくてはなりません。本当のことを言えば、歴史は人が望んでいることを証明しているのであり、その証明は決して何ら価値あるものではありません。或る賢明な歴史家が、「各々の歴史の背後には他の記録があり、それが最初の記録を崩している」と私に言いました。私は嘗て、有名なフランス王であるルイ十一世について大変に詳しい講義を聴きました。私はこのブルジョア階級の王の大変正確な観念まで自分で創りましたが、王の帽子にも汚れのない小さな善意がありました。偉い家臣たちに反対して町の人々と結び付き、王としてフランスを統一させるのに貢献したのを私は知りました。そのことは、私には大変に受け入れられるように思えました。フランスの統一は今も行われていますが、それは昔に努力したからです。歴史は政治について確実に予測し、事件の後にかんがりの出来事が続いて起きますが、それは最善なことではありません。

しかし、私が聴いたその先生の行いは評判が良く、彼はそれを廃墟の上に築きました。彼は全く新しいルイ十一世のデッサンを描きました。それは殆ど一つ一つが正確で、私がそれまで教えられたことと反対でした。その上、彼は最もらしいことを証明しました。これらの授業は私には無駄ではありませんでした。私は今、この二人のルイ十一世に代わる別の三人目のルイ十一世を待っています。もっとも急いでいる訳ではありません。

私たちはジャンヌ・ダルクの何を知っているのでしょうか。どんなに古い書類でも十通りに解釈されて一つという訳にいきません。神が畑にいた娘と話をして、当時のフランスを救ったことを証明するには、余りに書類が少なすぎます。これらの証拠書類を前にして信じない者は、その後の有力な書類も信じないのでしょう。しかし、反対のことを証明するにも少なすぎます。古い書類に証拠が書いてあっても、人は信仰を捨てません。それ故に信じる者は、何時も侮辱であるとか冒瀆的な言葉であるような種類の議論になります。そして彼は、絶対に間違っていない。私は恐らく欺されていないと断言します。ジャンヌ・ダルクが天の神から靈感が与えられたということを、タラマ教授が疑問視する記録は間違いはありません。それ故に、教会に反対する歴史を解釈する時、彼は本当の論拠を与えていません。彼は本当に善意でもなく、誠実でもないのです。ところで私は何度も試したのですが、非難されるのを避けたい時は、本当に誠実でなければならぬのです。

(一九〇八年十二月五日)

(1) フランソワ・タラマは、パリのリセであるコンドルセ校の歴史学教授で、ジャンヌ・ダルクのその使命について神聖な性格を乱暴に否定したために告発され、異動させられた(一九〇四年)。四年後にも未だ人々は覚えていて、極右王党派のアクション・フランセーズの十二名ほどの学生たちが、ソルボンヌ大学で行われていた彼の公開講座を混乱させた(一九〇八年十二月)。カムロ・デュ・ロワ(極右王党派の活動家)は、カルチエ・ラタンを制服し始めていた。

(2) 実際に、〈家長同盟〉は専ら、あるいは殆ど公立小学校を監視していた。

百七十二 大聖堂と町(LA CATHÉDRALE ET LA VILLE)

ゴシック様式で、最も美しい教会を手本として模倣した新しく出来た教会が、何故何時も見ると殆ど醜いのか、私は屢々自問しました。恐らく、それを説明する理由は沢山あります、例えば石の色であり、綺麗な線ですが、空気や雨のお陰で十分な美しさを擱んでいませんでした。何よりも所縁のある場所に平凡なものが建てられており、ゴシック建築ばかりでは似合いません。

町の大聖堂を決して分ける必要はありません。曲がりくねった道や小さな家がひしめき合った古い様式の町は、大聖堂にとっての額縁です。煙突や屋根で出来た森から抜け出た塔でなければなりません。ボンスクール(1)へ行きなさい。そして、古キルアンの風景を手に入れて下さい。全ての塔と家々が、二つとないものを形づくっているのをあなたは見ます。アミアンと取分けブルジュのような町もありますが、そこには一体となって見える町があり、低い方に大建築物が続いていて、町の足の様です。実際に大聖堂はそれ故、町の通りから始まって塔の天辺が終点です。町全体で大聖堂を完成させています。その様な光景は美しく、基本的には社会生活の形成と人間関係の構造という織物を作っているのだと私は考えます。

もしもそのことを見抜いて知っているなら、この緻密な構造は、建築家が求めたりしなかった生き生きとした印象を与えています。もしも私が小さな登り道であったなら、上を向いて空や雲を探しながらその町に取り憑かれることでしょう。その時は、矢、尖塔迫持、円花窓が高い処から私の心を捉え、慈悲の心を閉じ込めます。大聖堂は上から下まで読み取れなければならない、と私は殆どの時に言っています。私の視線がそのように余儀なく大地に戻って来た時、家や屋台の店や道で出来た町の全てを知るに違いありません。ゴシック様式の柱に寄りかかるこれらの屋根は、空気のように軽い石を、通りの石畳と結びついていて、センスの良さに溢れていました。

しかし、現代の銜学的な考古学者たちは、そこでの説明に困っています。彼らは美しい大聖堂に驚嘆し、そして古い家にも驚嘆しますが、二つを結びつけません。もしそれが出来たなら、彼らは大聖堂を博物館の部屋の中にある陳列ガラスのケースに入れますし、別の部屋では古い家に含めます。仕方がなく、彼らは大聖堂の足まで清掃します。辺り一面を、碎石でローラで敷き固めるマカダム式碑石舗道にしたがります。

サン・トゥアンの町の正面の多くに失敗した建築家ヴィオレ・ル・デュクの間違いは、紙の上

に作ったことです。正面は旅行者の眼には醜くありませんし、眼の高さで紙の上に集められて作られたものです。しかし、下の方から見てご覧なさい。小さな通りで身を寄せ合わせなければならぬかの如くです。その時、高い部分は大空に届きません。低い処は全てが大地に垂直に這入り込み、要塞の壁のように冷酷です。今からバック通りを通して大聖堂へ接近しなさい、そしてあなたは、石の力を実際に確かめるのです。

(一九〇八年十二月十八日)

(1) ボンスクールは、ルアンの東郊約四キロにある町

百七十三 平和同盟 (LIGUES POUR LA PAIX)

〈平和〉のためには〈同盟〉が重要です。〈同盟〉から私が時折思い出すのは、何時も同じことを言っている沢山の小さな書類です。それらの同盟にあるのは、会長、会計係、秘書、委員会、公開講座、会議、宴会です。これらの同盟は、それらのために存在しています。それらの活動は、それ以上のことはしません。同盟は大きくなり、食べ物を食べて、眠ります。危機の時には代議士が立ち上がり、同盟の名前のことを話しますが、あなたは決して理解しません。政府は静かに、そして公然と戦争の準備をします。政府の予言者たちは、そのことを恰も避けられないかの如く私たちに言います。現在は戦争のための造船計画が準備させており、私たちは何億フランも支払います。〈平和〉のための〈同盟〉は何を造っているのでしょうか。それらは新聞を追い払い、会費を領収します。それらは消化します。それらは眠ります。ミルクをたっぷりと与えられてまるまると太ったこれらの赤ん坊には、何が欠けているのでしょうか、食べることと眠ることが仕事なののでしょうか。彼らには思考が欠けているのです。

はっきりと定められている共済事業、老齢年金、病気の無料診療又は火災時の補償金が問題となるや否や、私は協同組合の力を信じます。しかし、思想を改革すること、偏見を無くすこと、〈真実〉と〈正義〉を表すことが問題になるや否や、その個人は静かに沈黙考した後で教えもなく書き独りで行動しなければならない、と私は信じます。社会というものは思考を殺します。そういうものです。

社会の中にいる私たちがより良く思考するためには、思考の計画を持ちます、つまり信条です。そのことを話す雄弁家たちは、彼らが同意することも予め知っています。もしも少しでも信条から遠ざかると彼らは不安になり、友人たちを悲しませます。そのことは自分も悲しく感じます。何故なら大衆は、冷水や温水のシャワーを浴びても力強く行動するからです。その時、雄弁家がありふれた考えに落ち着くのは避けられません。その結果、彼らはミサを行います。聖歌を歌います。皆が眠ります。

私は或る日、有名な講演者の話を聴きに行きましたが、彼は〈平和〉のために話しました、そして滑稽な論拠で私が正しいと信じる結論を主張しました。私は抗議しますし、納得がいきませんでした。友人たちは優しく私に言います、「私たちの主張を弱くするのは止めよう。〈主義〉

の重要性を守りましょう」。かくして思考する代わりに、話すようになります。そのメンバーは明白な心地よい光で眠ります。彼は明白なことを余りに当てにします。彼を取り巻く者たちの賛意の表明が、新しい世界が生まれたと信じさせます。その同盟は、最早周りの者に噛み付きません。自分自身に陶醉し、自分自身の内部で興奮します。同盟は自分の臍を見ながら、夢を食べているのです。

(一九〇八年十二月二十日)

百七十四 神の子キリスト (L'ENFANT-DIEU)

クリスマスに関する昔からの神話は、絵画によっても重要なことを語っています。信じられないことは屢々あり、殆ど毎日ありますが、何か〈精神〉の申し子のようなものが牛や驢馬の中で生まれます。彼の母親は全く単純であり、父親は少々無骨者で、彼らが生んだこの小さな王を熱愛します。額に皺もなく、瞳の中に暗影を宿さないで、若さを生む時代の息子しかこの地上には神々しいものは最早何もありません。もしも自分自身を欺くことなく牛と驢馬の間で成長したならば、そこには正義という労働者がおります。大地の上を歩く彼をご覧ください。世界の鏡となった瞳の中で、事物も人間も本当の関係で整理されます。

彼は十五歳にもなりません、既に神学者たちを驚かしてびっくりさせます。彼の一言が、神学者たちの書物よりももっと遠くへ広がって行きます。そのことは彼が物事を良く見ていることから齎されるのであり、反対に神学者たちは書物しか見ていません。従って既に、この悪の精神を殺すために彼らは陰謀を企てています。しかしそれまでは、話す前に思考するこの若々しい青年の実力に十分譲歩しなければなりません。何故なら国民が聴いているからです。国民は息子も王も知っていますし、何度も喝采します。光は闇を一掃しますので、〈真実〉が戦うことなくそのものの存在だけで〈悪〉に取って代わります。不正との関係はだらけです、何故なら、それは手品師が結んだ結び目でしかなく、一方の仕事と他方の権力とを結ぶからです。恐れたり期待する代わりに、理解することが大切です。結び目を理解しなければなりません。揺すぶるのではありません。奴隷たちが既に、ベッドの上で手足を伸ばしています。盲人は見ます。聴覚障害者も聴きます。身体障害者は歩き出します。

今の歴史は全く理解し難くなっています。障害者が歩かないことを知っていますが、何故でしょうか。〈精神の息子〉を十字架にかけたことが語られます。しかし、そうではありません。私は昨日彼に会いました。彼は心配そうな顔をしていて、年齢からも両眼は冷淡でした。自尊心と野心と吝嗇が、唇の回りの皺に苦しそうに刻まれていました。彼は王のようにマントを着ていて、冠を被り、王杖も持っていました。哀れな人々は、それでも彼を王だと信じましたが、彼自身は最早信じていませんでした。ついにどんな詭弁哲学者でも彼に罠をかけました。どんな間違った知恵でも彼の中に這入りました。どんな手紙でもこの精神を殺しました。どんな悪魔もそれをもぎ取りました。どんな山の上でももぎ取りました。彼にはどんな王国でも与えました。どんな

世俗の愛でも天国の愛を墮落させました。どんな心の弱さも生き生きとした知性を曇らせました。どんな間違いも失敗から失敗へ彼を導き、自分自身を絶望するまでになり、ついには彼自身で我を忘れました。知ることとは容易なことではありません。単純な人々はそんなにも遠くまで探しに行きません。神の子キリストは三十三歳で死んだと彼らは言っています。

(一九〇八年十二月二六日)

百七十五 大聖堂と森 (CATHÉDRALE ET FORÊT)

詩人と歴史家と建築家がゴシック様式について話をしていました、何故ゴシック式の円天井や三葉飾りや薔薇窓は部屋の花々が生長するが如く、考えたことがなかったが私たちの土地に広まったのか、お互いに質問していました。詩人は石で出来たこの様式の中で言葉以外は理解しませんでした、彼によれば宗教的魂の神秘を素晴らしく巧みに表していて、石で出来た詩であるということです。詩人は言います、「横手のドアから大聖堂へ這入りなさい。小さな本堂の円天井の方を見上げてご覧なさい、そして大きな方へ歩きなさい。弓形の一番高い処が他のものを断ち切って現れるや否や、あなたは偉大な天啓を得るでしょうが、それは冷静な計算と饒舌な神学よりももっと強く心を打つものです。静謐で良く響くガラス窓の薄明の光と、幻想的な影であるあなたの肉体を抑え難いこの動きに結びつけなさい。その時、ほんの短い時間にあなたは恐れ、愛し、祈り、歌います。そこに本当のミサ曲書があり、そこで一人ひとりはずらずらと読むのです」。

歴史家は言います、「そんなことはありません。詩を創るのはあなたです。大聖堂は野心を持った散文でしかありません。町と町は何時も競争しなければなりません。ですから各々の町は隣の町よりも大きいことを望みますが、それを言ったりしません。そしてゴシック様式に関しては、恐らくそれは何か自然な必然性とか習慣によって頭に浮かんで来た観念であり、根本的には同じことなのです。ゴシック式の尖塔は神秘的な頭脳から出て来たものではありません。海岸で漁師たちは昔、小屋を造りましたが、その屋根は古くなった船をひっくり返したものだだったと私は本で読みました。大聖堂の中央広間がひっくり返した船に大変よく似ているなんて、あなたは信じないですか。その上、中央広間 (nef) とかホール (nauf) という言葉は、船 (navire) を意味するラテン語から来ています」。

建築家は言います、「へえ！ でもそんなに昔のことを言わないでくれ。何時の時代でも造れるものを造ってきたのだ。それらの町が重要になるに依じて、円天井はだんだんと高く大きく造られ、従って何処かが少しは崩れるから、主として石が柔らかい地方で造られたのだ。かくして全面アーチを止めて交叉アーチを生んだが、それは私たちの眼に慣れている石工にとっても都合が良いことでしかない」。

彼らは森の中の道を、こんなことを歩きながら話していました。背の高い大木の下に這入ります。幹は一条の光に照射されて登って行きました。殆ど幹と同じ高さの処に光と同じ色の枝が

見え、その枝は思索家のようにちょっと曲がっていました。それらの枝は交叉アーチの形をしていて相交わっていました。小枝はあちらこちらに大空を少し見せていて、薔薇窓が描かれていました。大地は剥き出しで良く響きました。影は鮮やかに地上に揺れていました。彼らの声は、森の精の神々が逃げて行くように、木から木へ流れて行きました。日が沈む頃には赤い光や紫の光が見えました。彼らは立ち止まりました。彼らと一緒に歩いていた木々たちも立ち止まりました。沢山のイメージがわき上がって来て、彼らの上に再び落ちてきました。彼らは黙りました。誰も神殿に相応しくさせた讃歌に気付きませんでした。

（一九〇八年十二月三十一日）

（第Ⅱ巻完・第Ⅲ巻へ続く）

一ノルマンディー人のプロポ II
【2013年8月号】

<http://p.booklog.jp/book/73384>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73384>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73384>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ